

Y02a 天体の地球衝突：誤報とその対処について

吉川 真（宇宙研）

1990年代になって、天体の地球衝突ということに関する話題がかなり出てくるようになった。その中には、映画のようなフィクションから天文学そのものに関係するようなものまである。ここでは、天体衝突という問題に関連して特に天文学と関わりが深いものについて考えてみることにする。

まず、最近流された天体衝突の報道をまとめてみると、西暦2000年の小惑星トーチスの衝突（1992年9月、フランスの雑誌‘Sciences et Avenir’）、西暦2126年のスィフト・タートル彗星の衝突（1992年10月、IAUC5636）、そして西暦2028年の小惑星1997 XF11の衝突（1998年3月、IAUC6837）がある。これらは、いずれも元の記事では衝突（ないし接近）の可能性が示唆されただけなのであるが、マスコミで報道される過程で誇張されてしまったものである。また、いずれも報道の直後に、衝突の可能性は否定されている。

問題であることは、上記のいずれの場合も、科学的に正確な情報が伝わっていないということである。今後ますます発見される小惑星の数が増大するにつれて、同様なことが繰り返されることが懸念される。すると、天文学に対する社会の信用を損なうことにもなりかねない。

天体の衝突のような問題を考えるときに重要なことは、その天体の軌道の精度である。コンピュータで計算された結果を盲目的に信じるのではなくて、そもそもどのくらいの正確さを持った情報なのかを把握する必要があるし、情報を出す側はこの点に細心の注意を払うべきである。日本でも地球接近小惑星とスペースデブリを専門に観測する施設の建設が始まった。この施設が完成すれば、日本でも独自の観測がかなり推進できることになる。この機会に、正確な情報を的確に発信するような体制の検討も始めている。